

第1248回(2015年度 第2回)4月6日

会員セミナー

イスラームを根底から理解する

—IS、ハラール・ビジネスに惑わされない12のアラビア語—

講師: 奥田 敦 氏 (慶應義塾大学総合政策学部 教授 / 慶應義塾大学SFC研究所イスラーム研究・ラボ代表)

過激派組織ISの動向が頻繁にニュースになる一方で、ハラール・ビジネスが注目されている。イスラームの世界について、イスラームの教えを軸にした人間・社会・法・文化にかかわる総合的研究者として活躍する奥田敦氏がイスラームの真実について語った。

「ハラール」は幸福を追求するもの

過激派組織Islamic State (IS) や18億人規模のハラール・ビジネス市場など、いまや日本企業にとってもイスラーム世界の動向は無視することができない。そこで、そうした動向の基礎をなすイスラームの教えについて、その根底をいくつかのアラビア語の表現から語ってみたい。

まずは、「アッサラーム・アライクム」である。これは「あなた方の上に平安あれ」という挨拶だ。私たちはあなたの敵ではない。ケンカはせず仲良くやりましょうという意味を持つ言葉で、日本語の「失礼します」に似ている。だが、現在、「アッサラーム・アライクム」と挨拶しているイスラーム教徒には、ISの問題など、困った現実がある。困った現実を引き起こしているのは、イスラームなのか、人なのか。

イスラームの教えは、西暦7世紀にアラビア半島に下されたが、イスラーム以前のアラブ人は、とにかく自己主張が強かった。そんな彼らにたとえ地縁・血縁によってつながっていても、人間同士は兄弟だと教えたのがイスラームである。それなのに兄弟同士が殺しあっているのが現状のアラブ世界だ。そのような絶望的な現実の中で彼らが絶賛してやまないのが、日本人の倫理観である。イスラームの理想の実現形態を日本人とその社会に見いだしている。

次にハラール・ビジネスの「ハラール」という言葉について考えてみたい。これは、「イスラーム法的に合法的なもの、許されたもの」という意味だ。ハラールはワージブ(義務、信者としての務め)に支えられているところが肝となる。イスラーム教徒は、礼拝、貧しい人への施し、ラマダン月の断食という義務を果たして、初めて自由が得られる。このようなことを理解した上でハラール・ビジネスを展開すべきだ。私は、ハラール・ビジネスには、「敬虔さ便乗型資本主義」とでも呼ぶべき側面があると見ている。信者たちの敬虔さが利潤追求の餌食になっているのではないかと危惧する。認証を取得した食品だけがハラール食とされ、清潔でハラールでしかも安価な食べ物が、そこから排除されてしまう状況も散見される。食に限らずハラールは、人類全体の幸福の実現を志向する。

「ジハード」は聖戦ではない

「ジハード」くらい世界中で誤解されている言葉はない。「聖戦」と訳されるが、決して宗教的目的のために人を殺しても構わない戦いではない。無辜の命を奪うことはイスラームから最も遠い行為である。メッカ期では戦闘行為は禁止されていた。「一層の善行で悪を追い払え。そうすれば、互いの間に敵意あるものでも、親しい友のようになる」とクルアーン(コーラン)は教える。

ムハンマドは「最善のジハードとは、暴君の前での正義の言葉(あるいは真理の言葉)」と表現している。つまり、言葉によって価値観や信仰の異なる人々と良い関係を築く努力こそが、真のジハードといえる。また、自分にとっての最大の暴君は自分自身であり、自分自身との戦いもジハードということになる。「ジハード=テロ行為」は、間違った考えである。このような考えに立って、本来のジハードをきちんと行うことが、IS問題の解決につながると考える。

「アルハムドゥリッラー」の精神で人とつながる

「アルハムドゥリッラー」という言葉がある。その意味は「すべての称讃はアッラーにあり」というものだ。この言葉には、浮き沈みのある人生において、「思い上がり、見下さず」「背負い込まず、押しつけず」という教訓が込められている。後ろ向きに諦めるのではなく、前向きに現実を乗り越える言葉である。アッラーがそうさせたと考えることで、人生でうまくいったときも思い上がり、悪いことがあっても自分を過度に責めたり周りのせいにしたりしない。皆さまも「アルハムドゥリッラー」という言葉を実際に口にしてみることで、これまでとはちょっと違った心の景色が開けるものと思えます。ぜひお試しを。

*当日は12の言葉に関する解説がありましたが、誌面の都合で四つのみ取り上げました。